
緋弾のARIA 片翼の武偵

WING

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア 片翼の武偵

【Nコード】

N3233T

【作者名】

WING

【あらすじ】

パートナーを失い、一人で武偵をしていた主人公『黒川翼』

二度とパートナーを持たないと決心した彼の前に現れた、

『神崎・H・アリア』 アリアと友人の遠山キンジとの関わり合いで彼はどう変わっていくのか……

二作品目です。駄文ですが、読んでくれれば幸いです。

プロローグ（前書き）

こんにちは、作者のWINGです。

今回、二作品目の投稿です。

もう一つの作品も連載中ですので、更新はかなり不定期です。

プロローグ

——空から女の子が降って来ると思うか？

大抵の人なら『ありえない』と言う筈だ。

それは、この俺、黒川翼も同じだ。降って来たら……いや、考えないでおこう。

そう思っていたが……降ってきたよ、緋色の髪の少女、神崎・H・アリアが……

ピピピッ、ピピピッ。

目覚ましの音が聞こえる。時間は……七時五十分。

ベッドから出て、必要な栄養だけが入った透明の四角い物体を食べた。

俺は、生まれつき味覚がない。空腹感もほとんど感じない。あと一つ無い感覚があるが

とにかく、地味な障害者なんだよ、まったく……

それは置いといて、朝食？を終えて次にすることは、相棒の銃の整備だ。

俺の相棒は去年逝った、俺のミスで……

それから俺は一人で武偵の仕事をやっている。

もう二度と相棒は持たないし持ちたくない。また、あんな思いをするのは嫌だ。

「おっと、ボーっとしてた。時間は……げっ、五十六分！」

バスは……間に合わないな。仕方ない自転車で行くか。

多分、始業式にはギリギリ間に合うはずだ。……何も無け

ればね……

この後、七時五十八分のバスに乗れなかった事を、悔やんだりもしたし、

喜んだりもしたと生涯語る。

一学期の始業式に間に合うように急いでると、

「その チャリには 爆弾 が 仕掛けて ありやがります。」

奇妙な機械の声と言った台詞を聞いたとき、背筋が凍った。

「チャリを 降りやがったり 減速 させやがると 爆発 しゃがります。」

「マジで？」

俺の隣には『セグウェイ』と言うタイヤを二つ並べて走るカカシみたいな乗り物が並走していた。

しかも、人が乗っているべき所には、スピーカーと『UZI^{ウージー}』と言う

短機関銃が付いていた。

爆弾を探すると、サドルの下で指先に硬い何かが当たった。触ってみるとプラスチック爆弾らしい物が仕掛けられていた。

「……C4か。この量だと、木っ端微塵だな……」

俺の頭に三つの選択肢が出た。

- 『 1・セグウェイを壊して脱出。
2・携帯で助けを呼ぶ。
3・この世にさよなライオン 』

何で某CMが出てきたんだ？とにかく3は……絶対はない。とりあえず、2を取り携帯で助けを呼ぼうとすると、

「助けを 求めては いけません。 ケータイを使用した場合も爆発 しゃがります。」

ああ、そうですか……。

俺は、人気の無い所を探していると、同じように自転車を漕いでいる人がいた。

あれは………キンジじゃねか！あいつもチャリジャックに遭ったのか。

キンジこと、遠山キンジ。俺が強襲科アサルトにいた時からの友人だ。兄が事故で亡くなり、シヨックで探偵科インケスタに転科した。

俺も似たような理由で探偵科インケスタに転科したから結構仲がいい。俺は、自転車をキンジの横につけた。

「よう、キンジ。」

「黒川！お前もか!？」

キンジは、状況をすぐに理解してくれたみたいだが、正直、どうしよう……。

「どっするっ。」

「人気の無い所まで行って、誰かに気づいてくれるまで待つ。」

「それなら、その第二グラウンドで待とう。」

「そうだな……。」

俺とキンジはセグウェイに囲まれながら、第二グラウンドに入っ
たが、

そこには、誰もいなかった。

「なあ、天国ってどんな所なんだろうな……。」

「なっ！？諦めたのか!？」

「お前も助かる方法が思い付かなくてよ……。」

そんな時、俺たちはありえないものを見た。

グラウンドの近くにある、七階建ての女子寮の屋上に、ピンクのツ
インテールの

女の子が立ってた。

遠目でも分かるその子は、いきなり屋上から飛び降りた。

「なっ、何をするつもりだ!？」

飛び降りた女の子はパラグライダーを展開させ、こっちに降下し
てきた。

「バツ、バカ！来るな！この自転車には爆弾が……。」

キンジは必死で来るなど言うが、女の子は無視してさらにこっちに来た。

すると、女の子は太もものホルスターから、黒と銀の大型拳銃を抜き、

「ほら、そのバカ二人！さつさと頭下げなさいよ！」

と、叫び声を上げて、問答無用でセグウェイを銃撃した。銃撃を浴びたセグウェイはバラバラになって壊れた。

上手いな、ランクはAから俺と同じS辺りだな……

その女の子は、ホルスターに銃を収めると、また近づいてきた。

俺たちを助ける気か？

でも、二人は無理だと思った俺は、女の子に叫んだ。

「おい！俺よりコイツを助けてやってくれ！俺は自力で何とかする！」

俺は女の子の進行方向から避ける為に、左にハンドルを切った。後ろでは女の子が何か騒いでいたが、無視して自転車を進ませた。

距離を確認する為、後ろを見ると女の子が逆さ吊りになってキンジを受け止めていた。

その後、自転車が爆発した。

「おーおー、怖いねえ……」

そんな事を呟きつつ、爆発に巻き込まれない事を祈りながら俺は自転車から飛び降りた。

自転車は、俺が飛び降りた直後に爆発した。

「うわっ！」

破片が飛び散り、自転車は跡形もなく吹き飛んだ。
グラウンドを駆け回った後、俺は服に付いた砂を落としながら立
った。

「まったく、ニュースで見た武偵殺しとそっくりじゃねえか……
……」

まあ、命が助かったので良いが。
俺は、キンジとあの女の子を探し始めた。

プロローグ（後書き）

感想をお待ちしてまいります！

プロローグ2

俺が通う学校名前は武偵高校、通称武偵高と言ってレインボーブリッジの

南にある、南北2キロ、東西500メートルの長方形の形をした人工浮島の
上にある。

そもそも、武偵と言うのは凶悪化する犯罪に対抗する為に新設された国家資格で、

武偵免許を持つていれば、武装許可、逮捕権を持つなど警察と同じような事が出来る。

でも、警察と違うのは、金さえ貰えば武偵法の範囲内ならどんな仕事でもこなす、要は『便利屋』だ。

そして、あの女の子がキンジを助けたのは、武帝憲章の一条『仲間を信じ、仲間を助けよ』に従ったからだろう。

俺は、それを守り切れず相棒を死なせてしまったがな………目の前で。

二人を探していると、体育倉庫の近くの木にあの女の子が使っていた
パラグライダーが引っ掛かっていた。

「この近くにいるのかな？」

パラグライダーの引っ掛かり方を見ると、体育倉庫の方にいる事が分かったが、
もう一つ気付いた事もあった。

「これは……改造された物だな。しかも、手縫いでかなり丈夫な縫い方をしてある。」

昨日今日で出来る物じゃないな。戦姉妹アミカでもいるのか？

あの射撃の腕も気になるし、調べてみるか。」

その後、俺は体育倉庫に向かった。

「な、何があつたんだろう……？」

そう言わずにはいられなかった。なぜなら、さっきの乗り物の残骸が散らばる中で、

キンジがあの子に二本の刀で襲い掛かられている所だったからだ。

二丁拳銃に二刀流……確か双剣カトラ双銃って言うんだっけ？しかも、キンジの様子も変だ。いつものあいつじゃない。

「この強狼男！強狼の現行犯で捕まえてやるんだから！」

「ま、待てアリア！」

あの女の子、アリアって言うのか。てか、何でキンジは襲われているんだ？

まさか、マズイ事でもしたのか！？あいつはロリどころか女嫌いだったはずだか……。

すると、茂みの中からまたセグウェイが五台も出てきやがった。

「おい！二人とも何やってんだよ！」

叫んだが、アリアは相当怒り狂ってるらしく、まったく話が聞こ

えてない。

キンジは気付き、アリアを守ろうとした。

俺は左袖の中に隠してある、近距離用武器『切り傷』^{スラッシュ}を取り出した。

これは一見、縄跳びの持ち手みたいに長さ約10センチ、直径2センチ

の円柱の形をしている。両端は青と赤の色で縁がなぞってあって、今は赤いほうを上にしてある。

攻撃の内容はというと……

「はっ！！」

俺は、一番近いセグウェイ二台に対し、横にスラッシュを振るった。

ヒュン と風を切る音が聞こえると、二台のセグウェイはスラッシュの通った所から二つに切断された。

これは、赤く縁取りされている方からは細く鋭いワイヤーが出て、物を切断する事が出来て、反対側の青い方からは、先端にアンカーの付いたワイヤーが出て壁を登ったりすることが出来る、とても便利な道具だ。

「残り三台！」

すると、残りの三台は俺に向けて一斉にUZIを撃ってきた。

「全部防ぎきれるかな……」

そう呟くと、鋭い方のワイヤーを体の前でプロペラの様に回した。

バチツ、バチツ。と銃弾がワイヤーにあたり切り落とされる音が聞こえる。

だが、流石に全部は無理のようで、

「しまった！」

防ぎ切れなかった一発が俺の右肩に当たりスラッシュを落としてしまった。

俺は横っ飛びしながら、腰のホルスターから

相棒の銃『FNブローニングハイパワーDA』と、

俺の銃『SIG SAUER P205』を取り出し、

横っ飛びしながら撃った。

セグウェイは今の銃撃で全部壊された。増援は無さそうだったのでチャリジャックは終わったらしい。

「一難去つてまた一難。どんな厄日だよ……………」

銃を収めて、スラッシュを拾っているとアリアとキングが固まって見ているのに気付いた。

「あ、あなた何者？」

アリアが驚きながら聞いてきた。

「この学校に通う、黒川翼と言う生徒さ。」

「凄い、あれを五台もあんな簡単に……………」

「とにかく、助けてありがとう。でも俺たちは急いでるんで。」

俺とキンジが歩き出すとアリアは、ハッとなって言った。

「あ、待ちなさい！強猿男は神妙に……っわおきゃっ！」

追いかけてようとしたアリアは、いつの間にか足元に転がっていた銃弾を踏んで

盛大に、奇妙な声を発しながら転んだ。

「翼、逃げるぞ。」

「お、おう。」

「こ、この……みやおきゃ!？」

また立とうとして転ぶアリア。ちょっとパンツが見えたのですぐに顔を逸らす。

「おいキンジ。いや、もう一人のキンジ。何をしたんだ？」

「気付くなんてな。実は、誤解されてな……。」

後ろを振り向くと、アリアが両腕を振り回しながら

「卑怯者！でっかい風穴あけてやるんだからあ!!！」

と叫んでいた。

これが、遠山キンジと俺、黒川翼と神崎・H・アリアとの硝煙にまみれた最悪の出会いだった。

第1弾 自己紹介のちに発砲事件

「おーいキンジ。間に合ったのはいいが、どうしてお前はそんなに暗いんだ？」

お前の周りに落ち込みオーラが出まくってるぞ。」

「……………今は一人にしてくれ……………」

来てから机に突っ伏してずっと、こんな感じだ。落ち込み度ハンパねえ……………」

クラスは二年A組だった。

「よう！キンジ、翼！お前らもAか。」

「相変わらずだな武藤。」

話しかけてきたのは車輜科クルマの優等生、武藤剛気むつむ身長190センチの大男でツンツンの髪が特徴だ。

「朝から元気ねえなキンジ？あれか、星伽さんと一緒にクラスになれなかったのが悲しいのか？」

すると、キンジが鬼の形相で机に突っ伏したまま武藤を睨み付けた。

「武藤……………今の俺に女的话题を振るな……………」

あまりの形相に、武藤が引いているぞ。

ちなみに、武藤が言う星伽さんとは、キンジの幼馴染の星伽白雪ほしの

事で

よく、キンジに御飯を届けに来るのを見た事がある。しかもかなりの美人。

「はい、皆さん。二年生最初のHRを始めますよ。」

担任の先生らしい女性が来たので、俺と武藤はそれぞれ自分の席に戻った。

「まずは去年の三学期に転入して来たカーワイイ子から自己紹介して貰っちゃいますよ。」

すると、なんと今朝の女の子、神崎・H・アリアが教壇に上がっていた。

俺は啞然としていた。キンジなんか椅子からずり落ちていたぞ。

そして、

「先生。あたしはあいつの隣に座りたい。」

と言って、キンジを指差していた。

クラスの奴らは、わぁーっ と歓声を上げていた。

よかった。キンジと離れていて。こっちに飛び火して火事になるところ……

「それと、アイツもわたしの近くにしないで。」

どうやら、火事は防げないみたいだ……。

「良かったなキンジ、翼！お前達にも春が来たみたいだぞ！」

よくねーよ！なんでクラスの奴らも『がんばれ』って感じの視線を送って来るんだよ！

「あらあら、最近の子は積極的なのね。じゃあ武藤君たち席を替わってあげて下さい。」

わーわー、ぱちぱち。

拍手喝采が始まってしまった。待て待て！俺はアリアについて名前以外何も知らないぞ！？

するとアリアがキンジの前まで来て

「キンジ、これ。さっきのベルト。」

と呼び捨てでベルトを返していた。キンジ、お前ホントに何をやらかしたんだ？

「理子分かった！……これ、フラグばっきばき立ってるよ！」

キンジの左隣に座っていた女子峰理子みねりこが騒がしく席を立った。

「キーくん、ベルトしてない！そしてそのベルトをツインテールさんが持っていた！」

これ謎でしょ謎でしょ！？でも、クロ君は何かな……分かったやつた！」

アリアと同じくらい小柄な理子は探偵科インクスタで一番のおバカキャラだ。制服をゴスロリ風に魔改造している。

クロ君という名前はこいつが付けたあだ名だ。でもこの名前、猫みたいで嫌なんだよな。

「キーくんは彼女の前でベルトを取る何らかの行為をした！そして、彼女の部屋に

ベルトを忘れてきた。そこにクロ君が乱入！そのまま3P！つまり、二人は彼女と恋愛の真っ最中なんだよ！」

な、何だよその推理論！そんなもん誰が信じるか……

「キンジと黒川かこんなカワイイ子といつの間にも!?」「影薄い奴だと思っていたのに！」

「3Pなんてフケツ」

しまった、ここは武偵高、バカの吹きだまり。奴らはこういった事で変に盛り上がるんだよな。

「お、お前らなあ。」

キンジが机に突っ伏して、俺がバカどもを沈める為にSIGを抜こうとした時

ずぎゆぎゅん!!

鳴り響いた二発の銃声がざわついていた教室をぴたりと静めた。真っ赤になったアリアが左右の壁に向かって銃を撃つたのだ。

「れ、恋愛なんて……くっだらなない！」

もう、どうにでもなってしまう……。

理子はふざけ踊っていた姿勢のまま、ず、ずと自分の席に着席した。

この武偵高、日常生活中に銃を発砲してもいい事になっている。

ただ、必要以上にしてはいけなただけであって……。

俺も相棒とよく撃ち合った事があるが、自己紹介の時に撃ったヤツなんて初めてだ。

「全員覚えておきなさい！そういうバカなことを言うやつには……」

今後、アリアの決まり文句である言葉を言い放った。

「風穴開けるわよ！」

第2弾 ドレイ×2

昼休みになると同時に、俺は窓から飛び出してスラッシュを使って隣の校舎に逃げ出した。クラスの奴らに質問攻めされるのは嫌だし。キンジも似たような方法で脱出したみたいだ。

「ふう。逃げるのも楽じゃないな……。」

と言って、俺の現在地は……あれ、ここどこだっけ？ま、いいや。

とにかく、校舎の屋上にいる。

メール届いたらしく携帯が震えたのを開くと教務科マスターズから、今朝のチャリジャックの周知メールが着ていた。しかも、写真つきで。

「っーか。写真撮ってるなら助けろつての。……いや、無理か。」

武偵二年生となると、教務科マスターズは助けてくれない。

何故なら、助けられるのは一年だけで、二年からは自力で切り抜けるって

言うのが教育方針だからだ。冷たいモンだ。

それにしても、あのアリアつて、どんな奴なんだろうか？

「うーん。仕方ない。情報科インフォルマに行くか。」

そう言つて、スラッシュを使って校舎を降りた。昼飯？十秒あれば食えるからいいや。

—————情報科校舎前

校舎の近くに来ると、何やら見覚えのあるツインテールが見えた。

「ん？アリアかな？どうしてこんな所にいるんだ？」

会うのも気が引けるし、仕方ない、調べるのは諦めようと思ったが、

「そういえば、アリアに戦姉妹^{アミガ}っていたっけ？あのパラシュートは改造物で、かなり丁寧に精密に出来ていたな。パラシュートを持ち歩いてるなんておかしいし。やっぱり、最近、作ったと考えるのが普通だな。」

気になるので俺は仕方なく、こっそりと校舎の中に入りアリアの情報を調べていった。

そして、情報を引き出したらずくに寮に帰った。

「やっぱり、戦姉妹がいたな。明日、会いに行くか。」

俺は寮の部屋で引き出してきて印刷した情報を見ていた。

この部屋、実は四人部屋なんだが、転科した時の俺の心理状態が良くないからって

一人でこの部屋を使っている。まあ確かに、あの時はひどかったな・・・。

おっとこの事は思い出したくない。

しばらくボーっとしていると、携帯が鳴った。

「もしもし、どなたですか？」

「俺だ、キンジだ。」

「おうキンジか。どったの?」

「今すぐに俺の部屋に来てくれ。」

どうしたんだろうか?とにかく、キンジの部屋に俺は向かった。キンジの部屋は、俺の真上だ。階段を使って上がりキンジの部屋の前に来た。

インタホーンを鳴らした、するとすぐにキンジが出てきた。

「ようキンジ。どうしたんだ?」

「いいから入ってくれ。」

「あ、ああ。」

。なんか様子を変だな。一応、銃を撃てるようにしておくか……
リビングに行くと、意外な人物がいた。

「あれ、神崎?なんでここにいるんだ?」

「アリアでいいわ。それより、揃ったわね。」

何が始まるんだ?揃ったってどういう事だ?

「あなた達、あたしのドレイになりなさい!」

いきなりドレイ宣言しやがった。

「ドレイって、どういう事だ？」

「そのままよ。あたしのドレイになるの。」

意味分からん。なにがそのままなんだか……

「今朝、助けてもらったのは感謝している。それに、その……お前を怒らせるような事を言ってしまったのは謝る。でも、なんで押しかけてくる。」

キンジが聞くとアリアは目だけをキンジに向けた。

「わかんないの？」

「分かるか！」

苛立った様子で答えるキンジ。

お前がおかしかったのがよく分かったよ。

「翼だっけ？あんたは？」

「さあ、なにがなんだかさっぱり。」

「すぐに分かると思ったのに。んーそのうち思い当たるでしょ。まあいいわ。」

なにがいいんだか……

「おなかすいた。」

話題変えすぎだっつーの！

怒りたくても、そのソファーにもたれかかるしぐさが可愛くて怒りづらい。

キンジは顔を逸らしている。顔赤いぞー。

「何か食べ物はないの？」

「ねーよ。」

「あるが、これって食べ物っていう部類なのかな？」

アリアがギョツとした表情で見してきた。

「あんだ、何食べてるの？」

「ん？これだが？」

と言って、いつも食べている無味、無色で長方形の形をしたゼリー状の

栄養食を一つ取り出した。

「なによそれ？すこし分けなさい。」

「いいが、口に合うか分からないぞ。」

一つ渡すと、アリアは袋を破いて、中身を少しかじった。

「うえ……なにこれ……味がしない。」

「だから言っただろ。俺は味覚障害者なんだ。味が分からないから

味が無いんだ。」

「先に言いなさいよ！風穴開けられたいの！」

「すまん。」

謝っておこう。確かにこれは怒って当然だ。

「キンジ。コンビニに行くか。」

キンジはよく行っているらしい。俺は飲料水を買う以外行かないけどな。

「コンビニ？あの小さなスーパーのことね。じゃあ行きましょう。」

「じゃあってなんでじゃあなんだよ。」

「バカね、食べ物を買うに行くのよ。もう夕食の時間ですよ。」

もう、どうでもいいや。というか、コンビニに知らん奴はじめて見た。

その後、俺は自分の部屋に戻り、すぐに寝た。

波乱の一日が終わった。

第2弾 ドレイ×2（後書き）

オリキャラ プロフィール

名前 黒川翼（くろかわつばさ）

ランク S

所属 元強襲科、現探偵科

容姿 エヴァンゲリオンのカヲル似、黒のショートヘア

武器 FNブローニングハイパーD.A、SIG SAUER P
205

スラッシュユ

その他 強襲科に所属時、蘭豹を倒したことがある（その後、リベ
ンジされる）

過去に相棒を自分のミスで失う。それ以来、パートナーを
持つ事を

拒絶する。遠山キンジとは友人関係がある。

キンジ同様に特異体質がある。（詳しい事は、本編で書い
てくつもり）

とこんな感じですよ。

翼 「詳しい事はって、まだ何かあるのか？」

W 「うん。あるけど教えない。」

翼 「まあ、そこところは作者に任す。」

W 「チートにならないように頑張るわ。それじゃ、」

翼、 W 「次回をお楽しみに！」

第三弾 間宮あかりたちとの出会い

—————次の日の放課後

「一年A組、一年A組……」

キンジとアリアが依頼クエストに行っている頃 俺は一年A組に向かって
いた。

アリアの戦姉妹、間宮あかりまみやに会うためだ。

情報は引き出したが、書類上の記録は時々、実際と違う事がある。
そのため、確実なのは調べる人に近い人物から聞き出し、記録と照
らし合わせることだ。

「一年A組……おつ、ここだな。」

一年A組を見つけ、教室のなかに入った。

放課後とあって、人は全然いなく三人の女子が残っているだけだ
った。

「あの、何か用ですか、先輩？」

一人のボーイッシュな女子が話しかけてきた。

「そうだけど、君の名前は？」

「アタシの名前は、火野ライカです。」

「俺は黒川翼だ。ところでライカさん、間宮あかりって子はいる？」

「え、はい。おーいあかり。先輩が呼んでいるぞ。」

すると、アリアと似た体型の女子がやって来た、間宮あかりって子だろう。

「何でしょうか、先輩？」

「ん、へえー。いい目をしてるね。目標に向かって頑張ってる人の目だ。」

「いい武偵になれるよ。」

別に変な事は考えてないよ。間宮さんは少し照れながら言った。

「そ、そんなことないです／＼／＼／」

「ランクとか関係ないよ。どれだけ気持ちがあるかさ。」

「そ、それより、私に何の用ですか／＼／＼！」

そうだった。少し話がズレたな。

「ちょっと聞きたいことがあってさ。」

場所は変わって、近くのファミレス。

そこに俺と間宮あかり、火野ライカ、佐々木志乃の四人がいる。

「ごめんな。こんな時間に付き合ってもらって。」

現在、夕方のちよつと前

「別にいいです。それで聞きたいことは何ですか？」

「君の戦姉妹、神崎・H・アリアについてさ。」

「アリア先輩についてですか？」

「そうだよ。」

資料だけじゃ分からない事だつてある。それを知りたいんだ。

「じゃあ聞くけど………」

数分間、ずっとアリアについて聞いて、色々分かった。

まず、あいつはホームズ家の人間でこと、検拳率99パーなどなど。それと、間宮さんが言うには、厳しいけど優しい人らしい。

「なるほどねえ。ありがとう。」

「いえ、どういたしまして。」

すると、志乃さんが話しかけてきた。

「先輩は何科でランクは何ですか？」

「ん？今は探偵科、前は強襲科さ。ランクはSね。」

「えっ！？そんなんですか!?!？」

一年生はあまり知らないのか。

「ん〜、そうだな。強襲科なら知ってると思うんだけど、ちょっと前に『黒鳥』」

って呼ばれてたコンビがいたのは知ってるかな？」

するとライカさんが、瞳をキラキラさせながら言った。

「それは聞いたことがあるっす。コンビは二人で、危険な依頼をたくさんしてきたって言う、

凄腕グループですよ？アタシ、憧れていたんすよ。

でもコンビがなくなった理由をみんな話したがないんっすよ。」

そうか、やっぱり気を遣ってるのか……。

「実は、俺はその『黒鳥』の一人だった。」

「ええっ！あの黒鳥の一人だったんですか！？」

「ヤバイよ、憧れていたグループの人に話しかけてもらったんだ、アタシ……。」

「あかりちゃん、これでSランクの人と会ったのは二人目ですね！」

俺の素性を知ってから、三人とも落ち着かなくなっちゃったな……（特にライカさん）
すると、あかりさんが聞いてきた、

「あ、でも、もう一人の人はどうしたんですか？」

「……………もう、この世にはいない。」

「えっ、それって、まさか……………」

「ああ、死んだよ。この話はよそう。」

俺の記憶の中で一番暗い部分だ、あまり思い出したくない。

「すみません。つらいことを聞いて……………」

「べつにいいよ。……………おっと、こんな時間だ。今日はありがとう。」

また会える日を楽しみにしてるよ。三人とも。」

そして、三人とは別れた。

—————男子寮、自室

「うーん。久ぶりに、色んな話を話したな。」

でも、悪くなかったな。相棒と話してる感じだった。

「でも、女の子達とファミレスで話って、俺がしたことって完全にナンパだよなあ……………」

武藤あたりに知れたら、きつとつらやましくて泣くと思う。

「さて、銃の整備しよう。」

銃を整備するために分解していると、P r i i i i P r i i i
iと携帯がなった。

「もしもし、誰ですか？」

「俺だ、キンジだ。アリアが話があるそうだ。代わるぞ。」

すると、アリアの声が聞こえてきた。今日も絶好調なアニメ声だ。

「翼？明日、あなたも強襲科と一緒に来なさい。あと、それからあたしとパーティ組なさい。」

パーティを組め？・・・嫌だ、またあんなことになるかもしれない。・・・絶対に嫌だ。

「嫌だ。それだけは断る。」

「・・・じゃあ、キンジが言った条件を言うわ、一回の事件だけならいい？」

・・・一回か、あまり気が進まんが、いいだろう。

「・・・分かった。組んでやるよ。」

「分かったわ。じゃあ、切るわよ。」

と言って、電話を切った。

「また、パートナーを持つのか・・・。まあ一度だけだからいいか。」

その後、さっさと整備をして、いつものアレを食べて寝た。

第三弾 間宮あかりたちとの出会い（後書き）

今回、^{ダブルキ}AAから、間宮あかりたちをだしました。

W 『完全にナンパだね、翼君？』

翼 『何か、取り返しの付かなくなる気がするのだが……。』

W 『まあ、頑張りなさい。』

翼 『しかし、俺の過去を少しでも明らかにしたな。』

W 『まだ、いろいろあるけどね。それはちょっとずつ明かしてくよ。』

翼 『次回をお楽しみに！』

W 『感想をお待ちしてます』

第4弾 古巣

戻ってきた。古巣に。

次の日、俺とキンジとアリアは強襲科アサルトの校舎に来ていた。

「キンジ。戻ってきたなあ。」

「ああ。もつとも、俺は二度と来たくなかったがな。」

「そうだな……。」

この学科の卒業時生存率は97.1%

つまり、この学科は100人中3人は死亡している。別名『明日無き学科』とも呼ばれる。

校舎に入ると、中では発砲音や剣戟の音が聞こえる。

うわあ、変わってねえな、この風景。

「え、キンジに翼?」

「キンジと翼が帰ってきた!?!」

中に入ると、俺たちに気付いた奴らが集まりだし、

「お前らは絶対帰ってくると思ってたぞ。さあ一秒でも早く死ね!」

「二人とも、死にに帰ってきてくれたか。じゃあ、さっさと死ね!」

ここ流の挨拶を始めた。ここでは相手に『死ね』と言うのが普通

の挨拶だ

あ、そういえば、

「はいはい。皆元気そうで何よりだ。それと、俺があの時開けた穴は？」

「おう、バツチリ塞がってるぜ！でも、相棒が死んだくらいで壁に穴に開けるな……」

「それ以上言ったらクロス……」

相棒の事を言った奴の顎にSIGを突きつけた。

相棒が死んだ事を軽く言う奴は誰であろうと許さない。

「す、すまん。」

「人の命は軽く見るものじゃない。命より重いものはない。」

ここであの事件の事を話すのは禁忌だ。^{タブー}

あの事件の後、俺は精神的に不安定になり、特に死んだ相棒のことを言われると暴れ出したらしい。

一番やばい時は、この担当教師の蘭豹の言った悪口に反応して襲い掛かったらしく先生を殺しかけたらしいが麻酔弾を撃たれて終わったらしい。

「まっ、命は大事に、って事だ。」

その後、緊張していた空気が解け、皆に挨拶をして今日は終了した。

外に出ると、アリアが門のところまで待っていた。

「……………あなた達、人気者なんだね。ちょっとビックリしたよ。」

「「あんな奴らに好かれたくない。」」

キンジと俺の声が重なった。

「でも、ここの人たちは、何かな、こう一目を置いてるって感じがするの。」

それは入試試験でのがあったからだろう。

強襲科の入試は、武装して自分以外の受験生を拘束しろって言う実践形式だった。

その時、抜き打ちで隠れていた教官を倒し、同じく教官を倒した狂戦士モードのキンジと本気で戦ったが、二人とも

体力の限界で倒れて引き分けた。（某超人格闘アニメ並に激しい戦いだったらしい）

「あたしなんか、ここでは誰も近寄ってこないからさ。

実力差がありすぎて誰も合わせられないのよ……………」

まあ、あたしは『アリア』だからそれでもいいんだけど。」

「『アリア』?」

キンジはアリアの言った『アリア』と言う言葉の意味が分からないようだった。

「キンジ、オペラの『独唱曲』って意味だ。一人で歌うパートの事だ。」

調べたんだが、アリアはここに来る前からずっと一人だったらしい。

「

俺が説明すると、キンジは何となく分かった気だった。

「なるほどな。何だ、俺たちをドレイにして『デュエット』かそれとも『トリオ』になるのか？」

「ぶっ……」

何気なくキンジが言うと、アリアは吹き出して、おかしそうに笑い始めた。

「あんだ、面白いこと言えるじゃない。」

「何が面白いんだか……お前のツボは分からん。」

「キンジはここに戻ったら生き活きてた。いつものキンジは自分にうそついてみたいで。でも、翼は違う。」

「ずっと何かを恐れてる感じだった。あなた昔、何があったの？」

「……話すつもりは無い。知りたいなら自分で調べろ。」

誰があのはなしをするか。今でも思い出さたくないんだぞ。

「……分かったわ。何かとても苦しい事だったのね。」

「……」

苦しいだけで済んだら可愛いもんだ。

「アリア、その話は終わりにしろ。俺はゲーセンに行く。お前は帰れ。」

そもそも今日から女子寮だろ。」

「ゲーせん？何それ？まあいいわ。わたしも行く。特別に遊んであげるわ。ご褒美よ。」

「俺はパス。それより戦姉妹が心配しないのか？」

「大丈夫よ。それよりも何で戦姉妹の事を知ってるの？」

「昨日あったからだ。それじゃあな、俺は先に帰るぞ。」

俺は二人と別れた。キンジが何か言ってたが無視して自分の部屋に帰っていった。

第5弾 夢とバスジャック事件

少し昔の日本のどこか。二人の少年が物陰に隠れていた。一人は黒のショートヘア、もう一人は少し長めの茶髪の少年だった。

「おい翼、今日ホントに取引があるのか？」

茶髪の少年は、翼と呼んだ少年に声を落としながら聞いた。翼と呼ばれた少年は、『またか』と言う感じで答えた。

「あるって言ったろ。これを聞き出すのに一ヶ月もスパイしたんだぞ俺ら。」

「だけど、なんか妙なんだ。静か過ぎる。」

「相変わらず心配性だな、鳥居は。」

鳥居と呼ばれた少年は、『考えすぎだな』と言って、息を潜めた。二人は今、世界中で麻薬、武器の取引をしている犯罪組織の捜索、逮捕を依頼されており
今日、ここで取引が行われる情報を掴みここで待ち伏せしている。

「そろそろ時間だな。まだ来ないのか？」

「静かに！誰か来た。」

すると、黒い服を着た大人三人と、武器商人らしい男が現れた。二人は、すぐに物陰から飛び出した。

「武偵だ！武器を捨てて手を挙げろ！」

「お前達を麻薬、武器の不正取引の容疑で逮捕する！」

男達は驚いた様子はなく、ただ無言で立っていた。

「手を挙げると言った！」

鳥居と言う少年が言うと、三人のリーダーらしい真ん中の男が、

「……………手を挙げるのはそっちだ。」

と言うのと同時に、物陰から二十人以上の黒い服を来た男達が銃を構えて出てきた。

「なっ!?!」

「死ね！」

男が言うと、一斉に銃口が火を吹いた。

「翼ッ!?!」

二人は、その場に倒れた。警官隊が来たのはその五分後だった。

「うううう……………はっ!?!」

翼と言う少年が起き上がると、病院の一室だった。

「気が付いたか。」

「ドクター。何があつたのですか!？」

医師は現状を説明しはじめた。

「君達は、奴らの罠にはまり撃たれたのだ。しかし、君の体には奇跡的に銃弾が一発も当たっていなかった。」

「相棒は、鳥居正影は!？」

「……残念だが。恐らく君を庇つたのだろう。彼の体には数え切れないほどの銃弾があつた。君を下にして折り重なって倒れていたようだ。」

「俺のせいだ……アイツは気付いてたのに、俺が無視したから……」

彼の目には涙が浮かんでいた、そして

「う、ウアアアアアアアアアアアアアアアアッ!」

翼と言う少年は、叫んだ。外は彼の気持ちのような大雨だった。その後、彼は一人になった……。

「うわあああつ!はあつ、はあつ……」

また見てしまった、あの事件の夢を……。
現在は、午前五時半。もう眠る事は不可能だ。

「……顔を洗って、支度をするか。」

その後、いつもより早く準備などをした。

七時五十分。そろそろだな。

部屋を出ると、外は雨だった。俺は雨が嫌いだ。あの時と同じ天気だから……。

「よう翼。今日は元気ねえな？まあ雨だから憂鬱なのは分かるけどよ。」

武藤、お前の雨の憂鬱と俺の憂鬱を一緒にするな。と言いたかったが、夢の事を
思い出しそうだったので止めた。

七時五十八分。時間通りにバスが来た。
みんながぞろぞろと乗ると、キンジが遅れてやってきた。

「の、乗せてくれ武藤！」

「無理だ。チャリで来い……っとそうだったな、お前チャリの前壊れたんだな。」

「一時間目フケちまえよ！という一訳で二時間目に会おう！」

「それじゃあなキンジ。頑張れよ。」

残念、キンジは乗り遅れた。そしてすぐにバスは出発した。

バスの中は缶詰で身動きがほとんど出来なく息苦しかった。

すると、一人の女子が携帯を取り出した。席に座れたやつはいいなあ。

「はい。……えっ!?!なに、何これ!?!」

その女子はかなり驚いていた。何があったのだろうか？

「ちょっと、貸して。」

俺が言うと、女子は震える手で携帯を渡した。

携帯からは、

「速度を落とすと 爆発しやがります。」

チャリジャックの時と同じ声が聞こえてきた。

「ちっ。今度はバスジャックかよ!誰か、連絡を入れてくれ!」

今度はバスジャック。しかもたくさんの人を狙ってきた。最悪だ。

第5弾 夢とバスジャック事件（後書き）

翼「俺が言っている事件の内容が分かったな。」

W「そうだね。今回、翼にはバスジャックの被害者側になってもらったよ。」

翼「俺はどうなるんだ？」

W「手伝ってもらおうよ。次の話で体質の片鱗を見せてもらおうからね。」

翼「まだ俺には何かあるのか？」

W「それは次回のお楽しみ。」

翼&W「次回をお楽しみに！」

W「感想をお待ちしてます！」

事件解決？

五分くらいたったのだろうか、一機のヘリが見えてきた。

「来たな。」

俺は、バスの窓から屋根によじ登り、運転席から取ってきた発煙筒をつけた。

煙に気付いたヘリはこっちにまっすぐに来た。

ヘリが近くまで来た時、俺は驚いていた。

なぜなら、見覚えがあるピンクのツインテールが見えたのだから。

「アリア、なのか？と言う事はキンジも一緒か。」

そして、救助隊・・・キンジとアリアがバスに降りてきた。

「翼！？何であんたがここにいるの！？」

「運悪く乗り合わせちゃった。とにかく、爆弾を探すぞ。」

「翼、とりあえずヘルメットだけでも付けてる。」

「お、サンキュー。」

ヘルメットを付けると、アリアはバスの下を、キンジは中を探し始めた。

俺は、屋根の上、バスの側面を調べていた。

「無いな。キンジ、中はどうだ？」

「それらしい物は一つもない。」

「と、なると。あるのは車体の下か。」

「あつたわ！」

アリアの声が聞こえた。どうやら爆弾を発見したらしい

「カジンスキー 型のプラスチック爆弾、『武偵語殺し』の定番だわ。」

炸薬の量は、見えるだけでも3500立方センチはあるわ！」

うおう。戦車でも吹っ飛ばかもな。

「アリア、解体を頼む。」

一体何が目的だ？何のために人を殺す？

誰も死なせない、絶対に阻止してやる。

キンジから通信が入り、このバスの行き先を言った。

「翼、犯人はこのバスを遠隔操作して都心部に向かわせるつもりだ。」

マズイな。このバスが都心部で爆発したら、大惨事だぞ。

その時、ドンと言う衝撃が走り、赤い車がバスの後ろから出て来た。運転席には……誰もいない。代わりにUZIの台座が付いていた。

銃を構えようにも、バスが揺れて照準が定まらない。

車がバスと並走するようになったとき、UZIの銃口が車内に向け

られるのが見えた。

「全員伏せるお!!!」

バリバリバリバリッ!

銃声のと一緒に聞こえる悲鳴、体中の血が引く感触が分かる。銃撃が止まると、腰からブローニングとSIGを引き抜き、車のエンジンを撃ち抜こうとしたが突然、バスが揺れ始めた。そのせいで、銃弾はフロントガラスを割っただけだった。

「キンジ、大丈夫か!？」

「一発食らったがプロテクターを着けといて良かった。ただ、運転手が負傷した。」

「誰か運転している?」

「武藤だ。今運転で頼れるのはあいつしかない。」

「分かった。それとキンジ、絶対に出てくるな。今、ヘルメットとかを貸して無防備だろ。」

「そうだな……。アリアは?」

キンジが気付き通信を入れるがアリアからの返事が無い。俺は、バスの後部に行った。すると、アリアがワイヤーを伝って登ってきた。

「アリア、大丈夫か？ヘルメットはどうした？」

「さっきルノーにぶつけられた時に割られたわ。キンジは？」

「中にいる。武藤に運転を任せてるらしい。あいつは今、装備を貸して無防備だ。」

アリアは現状を理解したらしく、二丁のガバメントを構えた。

「で、さっきのルノーは？」

「そういえば、どこにいった？」

姿が見当たらない、どこに行った？後ろにはいない。

逃げたのか？いや、あれだけの妨害をしたんだ、また妨害をするに違いない。

「武藤。さっきの車は？」

「ルノーか？撃つだけ撃つた後かなりのスピードで前にいったぞ？」

前に行った？逃げたのか？

「ん？うわっ！？翼、奴が逆走してこっちに来ている！」

「戻ってきたわね！」

「まっ、待てアリア！慌てるな！」

アリアが先に前に行く。アリアは武偵殺しの事で目の前の状況を把握していない。

奴がどのくらいの位置にいるかが分かっていたいなかった。

「!！」

付いて行った俺が見たのは、ルノーがUZIを発射しているところだった。

俺はとつさに、アリアを庇うように前に出た。

ビッスッビッスッ!

強い衝撃が胸に来た。そして、撃たれた衝撃でバランスを崩し

「あ」

「翼ッ!!！」

バスから落ちた。バスの屋根の縁が遠ざかっていく、アリアが手を伸ばしているが間に合わない。

俺は、道路に叩きつけられた。転がっている最中、バスが一瞬だけ見えた。

ヘリからの狙撃でルノーと爆弾が壊されていた。狙撃したのは・・・レキが。

「サンキュー、レキ・・・・・・・・。。。」

そう呟いて。意識を失った。

事件解決？（後書き）

W「どうだった、翼？」

翼「……………（気絶中）」

W「あゝ。そうだったね。気絶してたんだ。
でも安心して、死んでないから。」

W「さて、次回、体質のことを話そうかな？」

W「次回をお楽しみに！感想をお待ちしてまゝです！」

第7弾 失望

「うん……うん？……よしよ、っと。」

道路に叩きつけられ散々転げまわり気絶した俺は、道路の真ん中でのびていたらしい。起き上がって、結構離れたバスのところまで歩き始めた。すると、バスの方からアリアとキンジが走ってきた。

「翼！大丈夫なの！？」

「まあね。運がよかったのかどこも骨折とかしてなかったし。」

「あれだけスピードを出したバスから落ちて痛くなかったのか！？」

「その点は大丈夫。俺、生まれつき痛みを感じないから。」

「どっいつこと？」

「生まれつき、痛覚が無いんだ。……あ、ヘリが来た。」

武偵校のマークが入ったヘリが上空に来て、ロープを下ろしている。

「それじゃ、学校に行くか。あゝあ、一時間目、明らかにサボっちゃったな。」

バスから引つ張り出してきたかばんを持ち、ヘリで武偵高に向かった。

さて、なんて言い訳をすれば……。

武偵高に着くと、いつも通りに授業を受けようと思ったが、アリアに

『一度、武偵病院に行きなさい!』と言われてしまったので、武偵病院で検査を受けた。

ドクターの診断は『時速100キロ近いバスから転落して怪我無しなんて奇跡だね。』
だった。要は、全然問題ないって訳ね……。

ロビーに出ると、アリアとキンジがいた。

「遅かったわね。どうだったの?」

「ん?全く問題なし。と言うより『ほんとにバスから落ちたの?』って言われた。」

「そう……。」

いつもと違って元気が無い。

「? どうしたんだ。元気ないな。」

「……………私はパートナー失格よ。それに、今回の事件で契約は解消だし。」

ああ。その事が、別に怪我の事は気にしてないが、今回でパートナーは解消だな。

「キンジは実力を出してくれなかったし、翼には怪我をさせちゃったし。」

「俺にそんな実力は……」

「キンジ、言つな。」

アリアは、最後に長い瞬きをして、言った。

「私が探してた人は、あなた達だったのかもしれないけど、違ったみたい……。」

アリアに失望された瞬間だった。

第7弾 失望（後書き）

W「やあ。大変な目にあつたね、翼君。」

翼「死ぬかと思つたぞ。」

W「ちなみに、バスの速度は約時速100キロ位だったと思うよ。」

翼「……………よく生きてたな、俺」

W「でもねえ、あれだけの速度から落ちて怪我してないなんて、不思議だね。」

翼「全くだ。と言うより作者。その言い方だとまだ何かあるのか？」

W「どうだろうねえ？あると思うんならあるんじゃない？」

翼「その言い方引つ掛かるな。」

W「ま、お楽しみつて事で、」

W & 翼「次回をお楽しみに！」

W「感想をお待ちしてまゝす！」

第8話 搜索

今日は日曜、その後、アリアとのパートナーは解消された。

俺が望んだ結末・・・なのに、アリアのことが頭から離れない。

俺はまだ、パートナーを求めているのか？

いやダメだ。パートナーを求めれば求めるほどあの事件の事を思い出す。

俺の暗い過去が・・・。

「それにしても、アリアの武偵殺しへの執着は異常なものだな。何があるのか？」

気になる。どうしよう・・・。

おれは今、女子寮のある一部屋の前にいる。
その部屋と言うのが、

「はい、どなたですか？」

扉が開くと、

「こんにちは、あかりさん。」

「じ、ここ、こんにちはです！？先輩！」

この前知り合った、間宮あかりさんが出てきた。
つまり、アリアの部屋の前にいる。

「えっと、アリアはいるかな？」

「ア、アア、ア、アリア先輩ならでか、出かけました！」

「お、落ち着こうよ……。」

この慌てっぷりはハンパない。俺って嫌われてるのかな？

「んで、どこに出かけたの？」

「確か、新宿に行くって言ってました。」

「何をしに？」

「それは知りません。ただ、」

「ただ？」

「昨日から先輩、元気がありませんでした。」

何か、とても悲しい事があったみたいで……。」

「……………」

胸が痛む。この前のバスジャックの後の事だろう。

「何か知ってますか？」

「……………ゴメン。それについては話せない。」

それじゃ、時間とって悪かったね。」

その後、俺は新宿に向かった。

新宿に着いたが、問題が発生した。

「どこにいるんだろう……。」

こんな街中で女の子一人探すなんて、海に落ちた真珠を探すくらい大変だぞ。

まあ、実際に海に落ちた真珠を探した事は無いが……。

「手当たり次第に探すか……。」

自分でもあきれくらい無茶な搜索が始まった。

その搜索が呆気なく終わりを告げた。

「……何してんの、キンジ？」

「（ビクウツ！）」

キンジが建物の影に隠れて尾行をしていたからだ。

「だれを追って……って、うおっ！」

キンジがいきなりネクタイを引っ張り影に引っ張り込んだ。
そして、小声で、

「静かに、アリアが誰かと会うみたいなんだ。」

「はあ？」

視線の先にはアリアがいた。

アリアの服装は白地に薄ピンクの入った清楚な服装だった。

そしてかなり可愛い。事実、すれ違う奴らの中には写真を隠し撮りしている奴もいた。

後で通報しとこ。

しばらく尾行していると、ある建物の前に来た。

「新宿警察署？こんなとこに何のようだ？」

キンジが分からないと言うが、俺の脳内では何かが繋がっていた。

「（・・・あの武偵殺しへの異常な執着。武偵殺しの犯人は捕まっているはず・・・」

じゃあ今までの事件は？模倣犯にしては凶悪すぎるもしかして、今捕まっているのは本物の犯人じゃないのか？

そして捕まっているのはアリアに関係がある人物なのか？）

だんだんアリアが武偵殺しに異常な執着があるのかが分かってきたような気がする。

すると

「・・・下ツ手な尾行。シッポがによるよる見えてるわよ。」

バレてるじゃねえか。隠れてたのがバカみたいだ。

「昔、お前が言ってただろ『質問せず、武偵なら自分で調べなさい』って。」

「つか、気付いていたならなせもつと早く言わなかつたんだ？」

「迷ってたの。教えるべきかどうか。あなた達は『武偵殺し』の被害者なんだから。」

やはりな。

「いいわ。来なさい。どうせ、追い払っても来るんでしょ。」

「そして、会うのは世間には武偵殺しと呼ばれている人。アリアにとって大切な人。」

アリアは驚いたように目を見開いた。

「何故分かったの？」

「武偵殺しへの異常な執着、ここを訪れた理由から何となく。確証はなかったが。」

「そうよ、これから会うのは私にとって大切な人。」

そう言つと、俺たちは署内に入つていった。

第8話 搜索（後書き）

（リアル鬼ごっこ中）

翼「この、クソ作者アアッ！」（鬼）

W「本当にすみませんでしたあああ！」（逃げる人）

翼「次、こんなに遅れたらぶち殺す！」

W「そ、それだけは勘弁！つーか誰か助けてええ！」

翼「次回をお楽しみ！ あっ、逃げるな作者！」

第9弾 異変

署内に入り、留置人面会室に入って待っていると
アクリルの板の向こうの扉から管理官二人に見張られながら一人の
女性が出てきた。

「……………アリアの……………お母さんの……………神埼……………
かなえさん……………」

「何で知ってるの!？ その情報はイギリスでは国家重要秘密にな
ってるのよ!？」

「あ、あれ？ こんな事を口走ったんだ？」

おかしい。何でそんな事を言ったのだろうか？

それにしても若いなあ。年の離れたお姉さんの間違いじゃなのかな。

「まあ、アリアったら、もう二股してるの？」

「ち、違うわよママ。」

キンジ、絶句。俺、啞然。

アリアと違って、かなりおっとりした人らしい。

「じゃあ、お友達さんかしら？ へえー。友達すら作るのが苦手な
アリアが

ボーイフレンドを作る年頃になったのねえ。」

「違うの。この二人は遠山キンジと黒川翼。武偵高の生徒で……………」

そういうのじゃないわ。絶対に。」

「うわあ、包丁、いや日本刀で果物をスツパリと切るみたいに切り捨てられたな。」

別にそこまでハッキリと否定しなくてもいいと思うが……。

「キンジさん、翼さん、初めまして。わたし、アリアの母で神崎かなえと申します。」

娘がお世話になっているみたいですね。」

「あ、いえ……。」

「むしろ、こっちの方がお世話になっているみたいで……。」

実はこの手の人は苦手だ。緊張して舌が上手く回らなくなる。

「ママ。面会時間が3分しかないから手短かに話すけど、このバカ二人は」

『武偵殺し』の被害者なの。先週、二人そろって爆弾を仕掛けられたわ。」

「……まあ……。」

かなえさんの表情が固くなった。どうやら、かなえさんは話からすると冤罪みたいだ

『武偵殺し』の。

「さらにもう一件、一昨日にバスジャックが起きたわ。」

最近、ヤツの活動が活発になってきているわと言う事は、シッポも出すはずだわ。」

そうしたら、狙い通り『武偵殺し』を捕まえる。

ヤツの件だけでも無実を証明できれば、ママの懲役864年から742年に減刑できるわ。」

それは、ほぼ無期懲役宣言じゃないか!? 一体どれだけの冤罪を着せさせられてるんだ!?

「そして、ママをスケープゴートにした『イ・ウー』の連中を全員ここにぶち込んでやるわ。」

イ・ウー? なんか聞き覚えが ぐうつ!?

「が、ああああ ぐうつ!」

「ちょ、ちょっと、いきなりどうしたの!？」

「翼!?! しっかりしろッ、大丈夫か!？」

い、痛い、頭が割れそうだ。何故だ、痛みを感じない俺が頭痛を !?

すると、何かがぼんやりと浮かんできた。

「(なんだ? ここは美術館!? 誰だ、この旧日本帝国軍の軍服を着た人は!?)

誰だ、このオールバック青年は!?

隣にいる、眼鏡をかけた科学者みたいな奴は誰だ、さらにその隣にいるのは、

. 親

父？」

そして、映像のような、イメージのような良く分からない物は消えていき、

激しい頭痛が来た。

「ぐぐぐぐぐぐッ、があ、あああ、ぐわあああああああ……！！！！」

そして意識がブラックアウトした。

第9弾 異変（後書き）

W「あゝらら。やりすぎかな？後悔はしてないけど。」

翼「……………」（気絶中）「

W「二回目だね。気絶すんの。」

さて、浮かんできたモノとは！？イ・ウーとの関係は！？

W「次回をお楽しみ！ 意見、感想をお待ちしてまゝす！」

10 弾 夢

目を開けると天井が見えた。

「知らないてんじょ……って言える訳がないよなあ……。」

「気が付いたみたいよ。」

「大丈夫か、翼？」

アリアとキンジが覗き込んできた。えーっと、

「何があつたんだっけ……？」

記憶が曖昧でよく思い出せない。何か映像のような物を見たような気がする。

「覚えてないの？あなた、頭が痛いつていつて倒れたのよ。」

そうだ……。よく分からないモノを見たんだっとな……。それにしても悪い事をしたな。

「すまんアリア……。せつかくのアリアのお母さんと会える時間をこんな風にしてしまつて……。」

「いいのよ……。ママも心配してたんだから。」

そう言っているが、声が少し震えていた。

「……………すまん……………」

最後にもう一度、アリアに謝った。
アリアに深い傷を作ってしまった……………。深く深く悲しい心の傷を……………。

次の日、俺は学校を休んだ。
とてもじゃないが、行く気にならない。
アリアの事、謎の映像の事で頭が一杯だ。

「……………はぁ……………」

前にあかりさんから聞いてたが、アリアの家『ホームズ』家は代々、
パートナーと協力して初めてその力を発揮するらしい。

だが、アリアにはそのパートナーがいない。

アリアに合わせられる力を持つ人がいないからだ。

『ドレイ』って言ったのも合わせやすくさせるためだったのかも
れない。

俺には…………無理だ。パートナーを持つのが怖い。失うのが怖い。
い。

もうあんな思いは嫌だ……………。

「……………」

一瞬、あの事件が頭をよぎった。頭を振り落ち着かせる。
さらに、この前の頭痛の時に見た映像は何だったのか未だに分からない。

「イ・ウー……か。親父なら知っていたかもしれないな。」

俺の親父、黒川誠くろかわまことは数年前に他界した。いや、殺された。親父は公安0課、殺しのライセンスを持つ人だった。

なのに、普通の一般人に正面から腹をナイフで刺されて死んだ。なぜ殺されたのか分からない。犯人もその場で自殺してしまったらしい。

母さん、黒川綾子くろかわあやこは親父が死んだ数カ月後に病死した。俺を遺して……。

一人になったところを親戚の鳥居家に引き取られた。そして相棒の鳥居隼人とりい はやとと出会い武偵になった。

そしてあの事件で失った。

「……横になろう。」

ベッドに横になった。色々、過去の思い出してしまったからだ。

「ふう……。」

横になり、仮眠を取る事にした。

そして、夢を見た。

「（飛行機の中のバー？ 誰かが争ってる。えっ、キンジとアリア？ 誰と戦っている！？ あっ！ アリアが斬られた！ 何なんだこの映像はッ！）」

「アリアアアッ！ はあっ、はあっ、はあっ……。」

驚いて飛び起きてしまった。時計を見ると寝て五分も経っていない。

「何だあの夢は？現実味を帯びすぎている。もし、本当なら……」

アリアは殺される！ 俺は急いで寮を飛び出した。

本来なら夢に出た事を信じるなんて馬鹿らしいかもしれない、
だが今の俺には、その夢を信じる事が出来た。

10弾 夢（後書き）

W「ちょっと、翼の過去を明かしました。」

翼「けっこう暗いな……。」

W「だよ。書いてる時も『暗すぎ！』って思ったもん。」

翼「つと、そんなとこじゃない！ ちょっと急ぎますんで……！」

W「あゝあ。行っちゃった。さて、今回はハイジャックです。」

W「次回をお楽しみに！」

翼「感想をお待ちしてます（遠くから）」

第11弾 恥ずかしさ100%オーバー

俺は寮を飛び出し、携帯をかけながら走っていた。すると、相手が出てきた。

『もしもし、遠山です。』

「キンジ。今どこにいる!？」

電話の相手はキンジだ。電話の向こうからも同じように走っているのだろう、弾む息と、足音が聞こえる。

『翼か。今空港に向かっている。このままだと、アリアは殺される。』

この声は、裏のほうだ。空港に向かっている、夢の通りになっている。そして、アリアが殺されることも……。

「裏キンジ。何故そう言える?」

『今回の武偵殺しは、俺の兄さんを浦賀沖で殺した。』

浦賀沖……何年か前に豪華客船が沈没した事件があったな、その事件で、一人だけ亡くなった人がいたな……それがキンジのお兄さんか……。

『兄さんは強かった、誰よりも……。その兄さんを殺したのが今

回の犯人なら……」

「……分かった。とにかく、アリアの乗る飛行機に何としても乗ろう。」

『了解。遅れるなよ。』

そう言っつて、携帯を切った。

空港に着いて、武偵の徽章を見せて金属探知をパスし、帽子にMが付く人もビツクリなくらいの速さで飛行機に半ば強引に乗り込んだ。

「はあっ、はあっ、ようキンジ……、遅れずに来れたな。」

「っ、翼……よ、余……裕だ……な……ぜえ、ぜえ……」

正直、結構しんどい。強襲科^{アサルト}を辞めたせいで体力が落ちている。

「飛行機は……止められなかったみたいだな。」

「すまん、アテンダントに頼んだんだが、機長に怒鳴られて無理だと……」

指差す先には小柄なアテンダントが首をコクコクと縦に振りながら震えていた。

「……どんな風に頼んだんだ？ まあ、仕方ないか。」

「ここにいってもどうしようもないので、

「アリアの所に案内してもらおうか。 あー……。 」

「！！（ビクウツ）」

ダメだ。完全に怯えきってしまって話すことすら出来ない。

キンジは申し訳無さそうにしている。落ち着かせないと……。 恥ずかしいけど仕方ない。

アテンダントを刺激しないようにそっと近づき、

ぎゅっ、と抱き締め頭を撫でた。

うう、恥ずかしい。でも、これが一番落ち着かせるのに効果的だ
って

相棒は言っていたな。

でも、明らかにおかしいだろ、これ……。

「あ……。 ありがとございます。落ち着きました／＼／＼」

数分間、抱き締めて頭を撫で続けたら落ち着いたみたいだった。

キンジは啞然としていた。俺だって恥ずかしさで死にそうだったんだぞ！

「で、では案内します／＼／＼」

そして、アリアの所に案内されていった。

案内されて分かったが、この飛行機、前にテレビで紹介されていた超豪華旅客機だった。

まず、造りが違う。一階はバーで、二階は通路の両方に部屋がある。
なんか、とんでもないモノに乗っちゃまった気がする……。

第11弾 恥ずかしさ100%オーバー（後書き）

W「落ち着かせるのはいいけどさー。これはちょっと……」

翼「正直、後悔している……」

W&翼「……………」（気
まずい空気）「」

W「そ、それにしても。夢の通りになるんだったら。

アリアはどうなるのだろう？」

翼「死なせない。もう誰も傷つかせないし死なせない。」

W「そう言って、自分が死ぬかもね。」

翼「不吉な事を言うなって……」

W&翼「次回をお楽しみに！」

W「感想をお待ちしてます！」

第12弾 胸の内

アテナダントに案内されて、アリアの席、というより部屋に案内された。

正直、これって本当に飛行機なの？って疑いたくなった。

俺とキンジはノックもせずに入った。

「キンジに、翼!？」

アリアが紅い目を大きく見開きながら驚いた声を上げた。

「な、何で付いてきたのよ」

太もものホルスターに手をやりながら聞いてきた。

「太陽はなんで昇る？月はなぜ輝く？」

「うるさい！翼、あんたは何で来たのよ！」

「俺は………夢を見たからだ。」

この回答って普通に考えたら「いい精神科医を紹介するよ」って言われても仕方ないよな……。

「夢?………どんな夢だったのよ？」

あれ?ここって普通「バカじゃないの?」って言うと思ったんだけどな。意外だ。

……しかし、あの夢の事を伝えるのは少し嫌だが、仕方ない。

「アリア。お前が誰かと戦って斬られて死ぬ夢だ。キンジもいたがその先は知らない。恐らく、二人とも……………」

「なっ!? おい翼!それは本当なのか!?!」

「誰と戦っていたの!? まさか武偵殺し? 武偵殺しね!」

アリアとキンジが驚きながらダブルでマシンガンの如く聞いてきた。

「ああもう!一人ずつ言え!俺は聖徳太子じゃねえんだ!」

まず、一旦二人を黙らせ、それぞれの質問に答えた。

「あたしはこの飛行機で戦うって夢でみたのよね?誰と戦っていたの?」

「……………分からない。だが、ほぼ武偵殺しと考えた方がいいかもしれない。」

「やっぱり!じゃあ、さっさと探して捕まえてやるわ!」

「や、止めるアリア。下手に動いてこの飛行機と一緒にオダブツになりたいのか!?!」

「そうだアリア!落ち着け、熱くなりすぎるな!」

キンジがアリアを羽交い絞めにして何とか抑えてる。

「は、離しなさい！ 奴はこの飛行機にいるのよ！」

だめだ、今すぐにも捕まえる気満々だぞ！
この暴れん坊貴族をどうするかを考えていた時、

ガガン！ ガガガーーーーン！

近くの雷雲から雷が聞こえた。

地上と違い、かなり近くで鳴っているため光と音が結構大きい。

ガガガーーーーン！！

一際大きいのが鳴った時、

「きゃっ！」

アリアが小さな悲鳴を上げた。

キンジが意外そうな顔で聞いていた。

「へえ、双剣^{カトラ}双銃のアリアにも苦手なモノがあっただんな。」

「うっ、うるさい！」

反論するも、声が震えているため全く説得力が無い。
それにしても、雷が苦手とは……。よっぽど飛んでくる銃弾の方が怖いと思うんだが……。

ガガン！

「ひゃあっ！」

アリアはスルリとキンジの羽交い絞めを抜け出し、ベットに潜り込んだ。

全くダメなんだな、雷。そしてキンジ、笑うのは失礼だ、と言いたいが

「ぷ……くくく……」

アリアのこの変わり様を見ると、笑いが込み上げてきてしまう。

「お、覚えてなさい。後で風穴開けてやるん（ガガンー！）ひゃあ
「！」

毛布の中から手を伸ばし、近くの椅子に座っていたキンジの袖をきつく握り締めていた。

「き、キンジ……」

泣きやがった！ まさか、泣くほどダメだったなんて……。

「な、泣くなつて。とにかくテレビでも見て落ち着いてくれ。」

と言って、テレビをつけてチャンネルを色々変えている。

すると時代劇の番組で指を止めた。

「なんだそれ？名奉行、遠山の金さん……？ この人って、キンジのご先祖様？」

「ああ。ほらアリア、これでも見て気でも紛らわせ。」

普通、この場面でこの番組を見るのか？などと思いつつも、とりあえずテレビを見る。

見ていると、いくら強がっていてもアリアは女の子なんだな。と思った。

大切な人を助ける為に、一人で戦ってきた。それに比べ、俺は・・・
・大切な人も守れず、

武偵になった理由すら見失い、ただ漠然と存在していただけだ。

しかも、パートナーを探していたアリアを跳ね返した。過去の恐怖に負けて・・・。

弱い、弱すぎる・・・。

だが、アリアの普通の女の子らしい一面を見ると改めて思う、

・・・アリアを助けたい。

こんな俺でも、あいつの助けくらいにはなれる筈だ。

そう、決心していた時、

パン！パン！

「！！！！」

俺たち武偵が毎日耳にする音、銃声が聞こえた。

第12弾 胸の内（後書き）

W「……そう思ってたんだね。」

翼「ま、まあ。」

W「アリアを助けたい、って思いに偽りは無いね？」

そして、覚悟もあるんだね？」

翼「ああ。って何だ？この、神様との約束事みたいなのは？」

W「雰囲気だよ雰囲気。さうて、次はどうしよっかな？」

翼「また何か企んでるだろ作者。」

W「それはお楽しみに。それじゃ、」

W&翼「次回をお楽しみに！感想をお待ちしてまゝす」

第13弾 武偵殺しの正体

通路に出ると、他の乗客と数人のアテンダントが騒いでいた。銃声のした方を見ると、コックピットの扉が開いていて、

「「!!」」

あの小柄なアテンダントが機長と副機長を引きずり出していた。二人は、全く動かない。傷口や出血が無い事から恐らく眠らされているのだろう。

どさ、どさ、と投げ捨てたアテンダントに俺とキンジは拳銃を突きつける。

「動くな!」

俺たちの声に反応して顔を上げると、にいつ、と笑い。

「Attention Pleaseきをつけてくださいでやがります。」

と言いながら、ピンを抜いたカンを投げってきた。

シューウウウ………

カンから白い煙が出てきた、これは……ガス缶だ! 頭の中に、様々な毒ガスの名前が出てきた。これは、マズイ!

「全員、部屋に戻れ!!」

俺が言う前にキンジが叫び、俺もアリア達と一緒に部屋に逃げ込んだ。

すると、バチン、と機内の電気が消え、非常用の赤い光になった。

「キンジ、翼！体は！？」

「大丈夫だ、一杯食わされた。アレは無害な奴だったみたいだ。」

「やっぱり、出やがったな『武偵殺し』」

キンジがボソリと呟いた。

「『やっぱり』ってどういふことなのよ？」

アリアがよく分からないという顔で聞いていた。

「『ヤツ』は、バイク、カージャックで事件を始め、そしてシージャックで

ある武偵を仕留めた。シージャックでは多分、直接戦っていた。」

「どうして？」

「お前、シージャックの事知らなかっただろ？電波を傍受してなくて。」

「う、うん。」

「ヤツは電波を出さなかった、つまり遠隔操作が不要だったって事だ。」

ヤツ自身その場にいたから。」

恐らく、キンジが言っているのはあいつのお兄さんの事だろう。そして話に俺たちが関わってくる。今度は、俺が話し始めた。

「そして、船まで大きくなったのに、またチャリ、バスになる。

アリア、今回の一連の事件は全部、お前がターゲットだったんだ。そして、これで三回目だ。

多分、直接対決になるだろうな。シージャックで倒された武偵と同じように……。」

アリアが、ギリツ、と歯を食いしばった。

その時、

ポポーンポポポン。ポポーン。ポポーンポポーンポーン……

ベルト着用の間抜けな音と共に点滅し始めた。

モールスだ、内容は……

「おいで、一階のバーいるよ……イ・ウーは天国だよ……か、挑発してやがる。」

「上等よ、風穴開けてやるわ。」

拳銃を抜き、一階のバーに行こうとする。

「俺たちも行く。翼はともかく、今の俺が役立つかは分らんがな。」

「来なくていいー!」

ガガン！ 再び雷が鳴る。

「どっする？」

「く、来れば……。」

一階のバーに、来た。トラップなどは一切無かった。一騎打ちする気満々のようだ。

着くと、さっきのアテンダントが、なぜか武偵高の制服を着て椅子に座っていた。

フリルだらけの改造制服で……しかも、まずい事に、こんな時に頭痛がして来た、まだ、激しくは無いが徐々に痛みが激しくなってきた。

「……お前、理子か？」

痛みを堪えつつ聞くと、にい、と笑い。

「あつたりいー。」

と言い、顔の皮……いや特殊メイクの薄い皮を剥いだ。

「なっ！」

二人の驚いた声が重なり、マスクの下から出てきたのは

「
Bon
soir
」
こんばんわ

と挨拶する、武偵高一のおバカキャラの、峰理子だった。

第13弾 武偵殺しの正体（後書き）

W「おっ、そろそろバトルの予感。」

翼「まさか武偵殺しが理子とは……………」

W「ついでに言うなら抱き合ったよね？」

翼「もう掘り返さんでくれ……………」

W「分かった分かった。さて、次回は理子との戦いの始まり！」

翼「夢通りになるのか……………」

W「それはお楽しみ。じゃ、せうの、」

W & 翼「次回をお楽しみに！感想をお待ちしてまゝす！」

第14弾 謎の記憶と驚愕

「アタマとカラダで戦う才能ってさ、けっこー遺伝するんだよね。武偵高にも、お前達のような遺伝系の天才がたくさんいる。でも、お前の一族は特別だよ……オルメス。」

オルメス、と言う言葉を聞いた途端、アリアが驚いて硬直した。オルメス？なんなんだ？

「あんた……一体何者？」

理子はまるで、その台詞を待っていたかのようにニヤリ、と笑い言った。

「理子・峰・リュパン4世。それが理子の本当の名前。」

リュパン？あのフランスの大怪盗のアルサーヌ・リュパン？4世って事は……曾孫なのか？

「だけど、誰もあたしを『理子』とは呼んでくれなかった。どいつもこいつも4世、4世って。お母様が付けてくれたこの名前を誰も呼んでくれなかった。……いや、結構、昔に誰かそう呼んでくれたけど、そいつもいつの間にかいなくなってた。」

「何が言いたいの？ 4世の何が悪いのよ。」

すると、理子が大きな声を出して叫び始めた。

「悪いに決まってるだろ！！あたしは数字か？ただのDNAか！？あたしは理子だ！！数字じゃない！！」

突然、ここにはいない誰かに対して叫び始めた理子。

それに比例するように頭痛が激しくなり、膝をつきながら頭を抑えた。

「ぐ……あああああああ！！うう……がああああ……！！！」

そして、また何かが流れ込んできた。今度は何だ！？

（壊れかけ……じゃない。造りかけの塔の上に誰がいる……この前の青年と誰だ？誰かと決闘しているようだ。）

すると、今回はもう一つ違う映像が流れ込んできた。

（なんだここは？寒い。牢獄？ 誰がいる！？ 金髪のブロンドヘアの女の子……）

あの子は理子じゃないか！？どこなんだここはッ！

ん、誰だこの男の子？ 何を話しているんだ？また誰か来た……って何だこれは！？

この巨人は誰だ！？ なっ！男の子を殴り飛ばしただと！？）

そして、映像の中で男の子が顔を上げた時、俺は人生で一番の驚愕に出会った。

（この男の子は……）

……小さい時の俺？)

そして、映像が途切れた。しかし、今回は違い、痛みはあるが
気絶するような痛みは来なかった。

「つ……さ。翼？ 翼!？」

キンジが俺を呼ぶ声が聞こえる。

立ち上がると。アリアや、理子までこっちを見ていた。

「またなの!?!なにがあつたの!?!」

さっきの映像の事は言えない。言いたくない。

「まただ。また頭痛がして、少しの間、意識が飛んでいただけだ。
それより、

理子が待てないって言う顔をしてるぞ。」

すると理子は笑いながら、

「へえ〜。意外に紳士なんだ。そうよ、さつさとあたしと戦え。そ
してあたしは

曾お爺さまを超えて、あたしに、理子になるんだ!」

そして、銃を取り出した。あの銃は、ワルサーP99だな。

「キンジに翼。お前達はお前達の役割を果たせよ。」

「なっ、何だと!?!」

キンジは銃を取り出したが……

バギユン！

かなりの早撃ちでキンジの銃だけを撃った。

「だーから。そこで見てろって言ってるんだ。
オルメスの相棒は戦いのヒントを与え、オルメスの能力を引き出す
のが仕事なんだから。」

「キンジ。理子の言う通りだ、この狭い機内だ。跳弾してアリアに
当たったらどうする？」

そう言って、俺達は引き下がった。
そして、アリアと理子の戦いが始まった。

第14弾 謎の記憶と驚愕（後書き）

W「はい、また出ました謎の記憶！」

翼「いい加減、この記憶について教えてくれないか？」

W「ん〜。ダメ。ネタばらし……って読者の人は大体分かってると思うけど」

まだカミングアウトはしないよ。」

翼「いつカミングアウトするんだ？」

W「もう少し後かな？ それじゃ、いつものように……」

W & 翼「次回をお楽しみに！ 感想をお待ちしてます。」

第15弾 死（前書き）

今回は、まさかの展開です。

第15弾 死

先に動いたのはアリアだった。

ばんっ！ と床を蹴り二丁拳銃を構えながら襲い掛かった。

武偵同士の接近戦で、拳銃は一撃必殺の武器ではなく打撃武器となる。

その為、勝敗は戦う者の技量、総弾数の多さがカギとなる。

恐らく理子はUIZは持っていない。フェアに戦いからだと思う。だが、アリアのガバメントには最大8発しか入らないのに対し理子の持つ

ワルサーP99

には最大16発だ。しかも、前に見た夢では相手も双剣双銃だった。
.....

「アリア、気をつける！理子はもう一丁持ってるぞ！」

俺が叫ぶと、理子はスカートの中からもう一丁のワルサーP88を取り出した。

「あれえ〜。何でこの事を知ってるのかなあ〜？まあ、どうでもいいや。」

そうよ、二丁拳銃はアリアや翼だけじゃないのよ。」

接近していたアリアはもう戻れない。

バリバリバリッ！！ と拳銃が火を噴きながら至近距離から撃ち始めた。

「くっ.....このっ！」

「あはっ、あはははっ！」

二人は至近距離でお互いを撃とうとせめぎ合う。武偵同士の戦いの接近銃撃戦は、相手の銃撃を避ける、相手の腕を自分の腕で払い合う。

その為、外れた銃弾が壁や床に撃ち込まれていく。だが、戦いにおいて武偵にはある規律がある。

『武偵法題9条・・・武偵は如何なる時も人を殺害してはならない。』

その為アリアは頭部を狙えない。理子も同じように狙わない。

「はっ！」

弾切れを起こした瞬間、アリアは両脇で理子の両腕を抱えた。ま、まずい！

「ダメだアリア！離れる！」

「くふっ」

理子が邪悪な笑みを浮かべた瞬間。

ザシュツッ！

「えっ？」

側頭部を斬られた。ナイフで。しかしナイフを持っているのは両腕ではなく。

「なっ!?!」

ツーサイドアップのテールだった。髪がまるでメデューサのように髪が動いていた。

「ボーツとしてるなッ!アリアを連れて行って応急処置をしろ!時間俺が稼ぐ!」

俺は、驚きで動けないキンジに指示を出し。倒れたアリアの前に出た。

「超能力・・・なのか?理子お前は本当は超能力者だったのか?」

「さあ〜。どうだろうね?」

そう質問している間にキンジはアリアを連れて一階から出て行った。

「くふふ。二人きりになったねえ〜。ほんとの事言つと、さつき撫でてくれた時、

懐かしいって思ったの。昔、お母様と名前を呼んでくれた誰かがしてくれたような

感じだったの・・・。何だろうね、翼に似ている感じがする・・・。

昔か・・・さっきの映像が正しいなら、それは・・・俺は思い切って聞いてみた。

「理子・・・お前は何で戦ってるんだ?」

「はあ？何を言ってる？そんなの、オルメスを倒してあたしになる
だつて……………」

「嘘だ。お前は何かから解放されるために戦ってるんじゃないか？」

そして、俺はさらに言った。

「お前は何を恐れてるんだ？何から逃げてるんだ？」

「……………うるさい。」

理子が肩を震わせながら言った。

「うるさいうるさいうるさい！お前に何が分かる！？」

あたしの苦しみが分かるのか？あたしの悲しみが分かるのか！？
知ったような口を聞くなッ！！」

すると理子はナイフを構えながら接近してきた。

「くっ……………」

とつさにスラッシュを取り出し、赤い方のワイヤーでナイフの斬
撃を防いだ。

だが、普段の理子から考えられないような力に押され始めた。

バツ と後ろに引くが。

ぐらつ と飛行機が傾いた。俺はバランスを崩し、ふらついた時、
顔を上げると、

「死ねッ！」

髪が握ったナイフが俺の首元にあった。

ザシユツ！！・・・ブシヤアアアアアツ！

首下を・・・頸動脈を斬られて血が天井や床、理子の制服を赤に染めていった。

ハハツ・・・頸動脈を斬られて大量に出血してるのに、痛みがないなんて何か不気味だな・・・。

「ゴフツ・・・」

最期に『理子』と言いたかったが、口から漏れたのは真っ赤な血だった。

そして、意識が、視界がだんだん暗くなって行って、見えたのは理子がバーから出て行く姿だった。

す・・・まねえキンジ。時間・・・稼げなか・・・った・・・。
す・・・まな・・・えア・・・リア・・・力に・・・なれ・・・
・・・なくて・・・。
相棒・・・い・・・ま・・・そっ・・・ち・・・に・・・
・・・逝・・・。

そして、何もかもが黒一色に染まった。

第15弾 死（後書き）

W「あゝあ。死んじゃった……。。

さて、どう復活させるかな？

案外、キンジに憑依させるのもいいかも……。。
ということだ、

次回をお楽しみに！ 感想をお待ちしてます！」

第16弾 『元』相棒と復活

「（ここは、どこだ？）」

上も下も、というよりこの空間自体が真っ黒の所に俺はいた。

「（何があつたんだっけ……ああ、そうか俺は死んだんだっ
たな……。）」

すると、真っ黒の空間に、ぼう、と光が差した。

その光のところに人が立っていた。見慣れた武偵高の制服を着た、

「相棒……。」

相棒……鳥居隼人が立っていた。

すると、隼人が口を開いた。

「なあ、翼。何時まで俺の幻影に囚われてるんだ？」

「えっ？」

怒ってるような悲しんでるような口調で言ってきた言葉に
俺は理解できなかった。

「何を言ってるんだ？」

「だから、いつまで過去の記憶に囚われてるつもりだ、と言ってる
んだ。」

ああ。俺が何時までたつても過去を振り切れてないことを言うてるんだな。

「無理を言うな。お前が死んだあの記憶なんか忘れられるわけないだろ。」

「お前はそう言って、未来の可能性まで殺す気か？」

さらに隼人が言った。

「俺はずっと見守ってきたんだ。そして、過去に苦しんでるお前を見ると

こっちまで苦しくなるんだ。翼、もう過去を振り払え。

そして、彼女の力になってやれ。お前はそう思っていたんだろ？」

何もかもお見通しか……。

「だが……俺はもう死んでしまった……。」

「?? 何を言ってるんだ。お前はまだ死んでないぞ？」

「は？」

何で?と言おうとしたら、俺の体が光りだした。

「時間だ……。戻るんだ、彼女たちの所に……。」

そう言っている間にも俺の体が光に包まれていった。

「相棒……。」

「もう相棒じゃないよ。お前の新しい相棒は……………」

「そうだったな。じゃあな隼人。」

消えかけながらそう言っただけ俺は真つ黒の空間から消えた。
消える間際、隼人は

「さようならだ、翼。いつまでも見守っている……………」

と言っただけ笑っていた……………」

「ううう……………」

目が覚めて体を起こすと、目から一筋の涙が流れていた。
拭き取ると、倒れる前と変わらない風景が目に入ってきた。

「！傷は!?!」

斬られたのを思い出し、首を触ってみると

「無い!?!傷が無い?!!どういうことだ?!!」

だが、斬られたのは現実だった。

なぜなら、首から顔の左半分は血で真つ赤だった。
制服も血で黒いシミが出来ていて下のシャツも真つ赤だった。

「(どこの猟奇殺人犯の被害者だよ……………?)」

そのとき、飛行機がまた グラリ、と傾いた。
そして、テールを切られた理子が来た。

「なっ！ 何でお前が生きているッ！？」

驚きながら聞いてきた。俺は『さあ』と言いつつ、
理子は、はっ、として言った。

「ま、まさかお、お前はアイツなのか……」

アイツと映像で見た巨人のことだろう。

「違う。それよりも理子。続きだ。」

そいつから逃げたいのなら何で誰かに頼らない？
お前だけの力じゃどうにもならない事ぐらい分かってるだろう？」

「違う違う違う！ あたしはあたしになるために戦ってるんだッ！」

そう言つと走ってバーの隅に行った。

壁には粘着式の爆薬がついていた。

「最後に言う。どうやら俺はイ・ウーにてお前と会ったことがある。」

俺がそう言つと、理子は壁を爆破して飛び出していった。

そのときの理子の表情は、驚きと疑惑が混ざっていた。

第16弾 『元』相棒と復活（後書き）

W「翼、復活ウツッ！ 次回あたりで一巻が終わると思います！

次回をお楽しみに！ 感想をお待ちしてます！」

17弾 秘密と悲鳴

「くっ………」

理子が飛び出していった穴から、室内のものが次々と吸い出されていった。

俺は、爆発して開けられた穴の傍にいたので、吸い出されそうになつていった。

「す、吸い出される………！」

俺は、急いでスラッシュのアンカーを打ち出し、反対側の壁に打ち込ませた。

そして、シリコンのシートが出てきて穴を塞ぎ、何とか放り出されるのは回避できた。

「「理子は！」」

誰かと声が重なった。って、だれ！？

「あつ、裏キンジ。いつからいたんだ？」

「お前が理子と何か話しているところから………ってそんなことより………」

俺とキンジが窓の外を見ると、あの布量が多い制服をパラシュートのようになして

降下していく理子の姿と入れ違いで飛んでくるロケットのようなもの、って、嘘だろ……。

ドドオオオオオオオオッ！

今までの爆発とは桁違いの大きな振動が体に伝わった。再び窓の外を見ると、左右に二機ずつあるエンジンの内、内側の二機が破壊されただけで何とか耐えれたようだ。

俺とキンジは操縦室に急いだ。

操縦室に行く途中に俺が死んでいた間に起きたことを聞いた。

「……………という訳だ。俺とアリアは理子からお前は死んだ、

と聞かされていたんだ。正直、信じられなかったが制服の返り血を見たら、

信じるしかなかった。」

「まあ、確かに俺は死んだ。でも、何で甦ったかは知らない。

気づいたら血まみれで寝てた。俺の推測では、何かの力が働いたのだと思う。」

例えば、お前のような体質的なものとか？」

「！ 知ってたのか？」

「いいや。普段と今の能力に差がありすぎるから二重人格かと初めは思ったんだが、

どうも違うみたいだから、危険な時に人格が変わったり能力が上がる体質なのかなと

思ったんだが。違うか？」

すると、裏キンジは答えを言った。

「少し違う。これは『ヒステリアモード』と言って、病気みたいなものだ。」

脳内である物質が一定以上分泌されると一時的にスーパーモードになれるって感じた。」

「なるほど、詳しいことは聞かないでおくよ。俺に今まで話してなかったところをみると、

他人に知られたくないみたいだからな。」

「………すまん。」

そんなお互いの秘密を言い合いながら操縦室についた。中では、アリアが必死に飛行機を操っていた。

「おそい！あんたいままで何、を………。」

アリアが俺を見て固まった。

「ん？どうしたアリア？」

「み・みみ……みぎゃあああああああああああああああああああああ
あああああっ！」

突然叫びだした。どうしたどうした！？

「お、おいどうしたんだ？」

「いやああああ！翼の幽霊が！亡霊がいるっつッ！」

あっ、俺が生き返ったのってアリア、知らなかったんだな。

「落ち着け、俺は幽霊じゃない！ちゃんと足があるだろう？」

「えっ……あっ……ほんと。じゃあ、本物の翼？」

「ああそつだ。それより、飛行機を何とかしろ！詳しいことは後だ！」

すると、アリアはすぐに飛行機を操縦し、機体を水平にすることができた。

だが、通信が入ってきたとき俺たちは、思っていた以上に事態が深刻だと知った。

17弾 秘密と悲鳴（後書き）

翼「何？この中途半端な終わり方？」

W「ごめんごめん。一度書いたら・・・とんでもない字数になっちゃってさ・・・」

翼「まあ、いいや。もうそろそろでハイジャック編も終わるんだろ
うっ？」

W「うん。多分、あと1、2話で終わるよ。」

翼「そんじゃ、いつものをやりますか。せいの」

翼&W「次回をお楽しみに！感想をお待ちしてま〜す！」

第18弾 ヒステリアモードの驚異

「……31……繰り返す、こちら羽田コントロール。ANA 600便、応答せよ。」

管制塔からの通信が入り、副操縦席に入ったキンジはインカムを取って返信した。

「こちらANA600便だ。先程、ハイジャックされたが今はコントロールを取り戻した。

機長及び副機長が負傷。現在、武偵3名が乗って操縦している。俺は遠山キンジ、もう2名は神埼・H・アリア、黒川翼だ。」

キンジが管制塔に返信をしている間に俺は、機長から拝借した衛星電話を使い、

乗り物オタクこと武藤剛氣に連絡を入れた。

すると、管制塔からの通信が終わった途端、武藤の声が聞こえてきた。

『もしもし?』

「俺だ、翼だ。」

『翼か!?今どこから掛けている!?!?』

「あ。キンジに変わるぞ。キンジの方が現状を把握しているから。」

そう言うと、キンジに代わった。

「代わったぞ。キンジだ。」

『キンジか！？お前のカノジヨが大変だぞ！』

「カノジヨではないが、アリアなら隣にいるよ。」

なんつー話をしてるんだか……。

「か……か、かの……かの！？」

カノジヨ扱いされたことで、アリアは真っ赤になっていた。

「ちよつとキン……っ！！」

不平を言おうとしたら、キンジに人差し指で唇を押さえられてしまった。

アリアはさらに真っ赤になって、硬直してしまった。

俺から見ると、リアルにカレシ、カノジヨみたいに見えるぞ……。

「武藤。ハイジャックの事、よく知ってるな。報道されているのか？」

「とつくに大ニュースだぜ。客の誰かが機内電話で通報してもしたんだろ。」

乗客名簿はすぐに通信科コネクが周知してな。アリアの名前があったんで今みんなで教室に集まったとこだ。」

そしてキンジは、羽田と武藤に現状を手短に教えた。

内側のエンジン二基がミサイルによって破壊された事も伝えた。

『ANA600便。とりあえず安心しろ。B737-350は最新技術の結晶だ。』

残りのエンジン二基でも問題なく飛べる。』

『それよりもキンジ。燃料計の数字を教えてください。EICASアイキャス・・・』

中央の少し上の四角い画面で、2行4列に並んだ丸いメーターの下にFuelフュエルって書かれた

3つのメモリがある。その真ん中のTotalトータルってヤツの数値だ。』

。。。
おお。なんとも分かりやすい。って、そんなことよりどれどれ・・・

「あつた。えーっと、今・・・540になって・・・538、536・・・
・どンドン減っている。」

俺が言つと、武藤は舌打ちをした。

『くそつたれ・・・盛大に漏れてるぞ。』

「ね、燃料漏れ！？止める方法は！」

アリアが驚きながら聞くと、少し間をおいて答えが返ってきた。

『方法は無い。B737-350の機体側のエンジンは燃料系の門も兼ねている。』

そこが壊れると、どこを閉じても漏出は止まらない。』

「どれくらいもちそうだ？」

『漏出のペースがかなり早い……言いたくねえが、もって15分だ。』

「りょーかい。キンジ、借りるぞ。あー、羽田コントロール？そっちに向かっている。
今どこら辺にいるんだ？」

『今は浦賀上空だ。……あまり余裕は無いぞ……。自動操縦は切らないようにしろ。』

「そんなもの、とつくに破壊されてるわ。」

アリアが目で示したところを見るとオートパイロットAutopilotと書かれたランプが赤く点滅して警告音を鳴らしていた。
まあ、限りなくヤバイってことか……。

「着陸の方法を教えてほしいんだが。」

『……素人がすぐにできるものではないのだが……
現在、同型機のキャリアが長い機長を探して……。』

すると、キンジはインカムを俺から取り、今だからこそできる方法を言った。

「時間が無い。近くの航空機、全てと通信を同時に開いてほしい。」

『どつする気だ？』

「手分けさせて、着陸の方法を一度に言わせてるんだ。武藤も手伝つてくれ。」

『聖徳太子じゃねーんだから……』

「できるんだよ。『今の俺』ならな。早くしてくれ、今は1秒でも惜しい」

そうして、次の瞬間、スピーカーからたくさんの声が入ってきた。俺とアリアも少しは聞き取ろうとしたが……

「だめだ……全然聞き取れない……」

「あたしも……でも、キンジはできるってことはやっぱり……」

アリアが何かを確信した目になった。

窓の外を見ると、東京圏の光が見えた。

第18弾 ヒステリアモードの驚異（後書き）

「お。ヒステリアモードのキンジは凄いねえ。」

翼「まったくだ。聖徳太子になりやがった。俺でも無理だ、あんなの。」

W「もうちょいでハイジャック編が終わるかも。」

翼「前も言っただけ、それ？」

W「……ま、まあそんなことより、いつものあれ行くよ……！」

翼「逃げているような気もするが、まあいいか。せーの

W & 翼「次回をお楽しみに！ 感想をお待ちしてます！」

第19弾 怒り

一気に11人の話声を読み取り、着陸の方法を知ったキンジは、羽田に向けて飛んでいた。横須賀に近くなったとき、

『AN600便。こちらは防衛省、航空管理局だ。』

あまり聞きたくない部署からの通信が入った。

『羽田空港の使用は許可しない。空港は現在、自衛隊によって封鎖中だ。』

『何言っているんだ！AN600便は燃料漏れを起こしているんだぞ！』

飛べてあと10分だ！もう羽田に行くのがギリギリなんだぞ！分かっているのか！』

武藤が怒鳴ったが、向こうからは冷たい返事が返ってきた。

『私に怒鳴ったところで無駄だ。これは防衛大臣による決定だ。』

嘘つけ。本当は、公安0課か武装検事辺りが唆したんだろ。

全く、やることが汚えんだよ！

すると、アリアが窓の外を見て、息を吞んでいたキンジと俺も外を見ると

F-15Jイーグルが横につけていた。

「おい防衛省。窓の外にあんたのお友達が見えるんだが……。」

『…………それは誘導機だ。誘導に従い、海上に出て千葉方面に向かえ。』

「海上に出たところを、ミサイルか機関銃でドカン、だろ？」

俺が本当の目的を言つと、向こうは黙った。

「どういうこと？」

アリアが聞いてきた。俺はお偉いさん方が考えているであろう事を言った。

「簡単な話だ。上はこの飛行機が無事に着陸できるなんて思っていない。

下手に街中に墜落されて大勢の死者を出すくらいなら、ほんの数十人死んでもらった方が良いつてことだ。背は腹に変えられないつてことさ。」

121

「そんな！この飛行機には一般市民も乗っているのよ！？」

俺は、キンジからインカムを取って、向こうに言い返した。

「防衛省。一言、言わせてもらつ。」

……………ふざけんじゃねえ！

俺たちや協力してくれた人たちの努力を無駄にする気が！

上からただ命令をするだけのお偉いさんには分からないだろうつな！俺たちの必死さが！」

怒鳴りつけて通信を切ると、アリアとキンジが驚いた顔で見ていた。

「悪い。命を軽く見る奴は嫌いなんだ。もう人が死ぬのを見たくない。」

「大丈夫だ。コイツは絶対に落とさない。」

キンジが自信有りげに言った。その言葉信じるぞ。

燃料は、あと7分。

「で、どこに着陸するつもり？ 都内には他に滑走路なんてないじゃない。」

「武藤。滑走路には、どのくらいの長さが必要だ？」

『エンジン2基のB737 - 350なら・・・最低2450m必要だな』

「・・・・・・・・・・そこの風速は？」

『風速？レキ、学園島の風速は？』

『私の体感では、5分前に南南東の風、風速41・02m。』

体感だけで風速、分かるんだレキ・・・。

「じゃあ武藤。風速41mに向かって着陸すると、何m必要だ？」

『まあ……大体2050つてとこだ。』

「ギリギリだな。」

嫌な予感がする……。

「キンジ、まさか『空き地島』に着陸するつもりなんじゃ……。」

「そのまさかだ。」

『……お、おい。本当にそこにいるのはキンジか?』

「ははっ……ここにいるのは誰だい、アリア。」

……俺も聞きたい。お前、本当にキンジ?

いくらヒステリアモードとはいえ、変わりすぎ。

性格まで変わるのか、その状態?

「え、えっと……キンジよ……。」

「と、そう言うことらしい。残念ながら。」

無線の向こうからは呆れ交じりのため息が聞こえた。

『人工浮島に……か。理論的には可能だが……。』

これは嬉しい情報だ。アリアの表情も少し明るくなった。

『だが、あそこは本当にただの浮島だ。誘導装置どころか誘導灯す

らない。

最低でも、飛行機は誘導灯がないと夜間着陸はできないんだ。おまけに、豪雨で視界は最悪。それに暴風と来ている。そこに手動着陸なんて……」

「じゃあ、中断して俺と心中するか、二人とも？」

「あんと心中なんて死んでもお断りよ。」

「いろいろと矛盾してるぞ……。墜落させたらキンジの一族をずっと呪ってやる。」

「はは。これは嬉しい。初めてアリアと意見が合ったよ。

俺も心中なんてお断りだ。アリアを死なせたくないし、翼の頼みでもあるしな。」

俺、苦笑い。アリア、赤面。

「と、言うことだ武藤。これより着陸準備に入る。」

『待て、待てキンジ。』空き浮島『は雨で濡れている！2050じや停止できないぞ！』

「それは何とかする。俺を信じる。」

『……か、勝手にしゃがれ！！しくじたら轢いてやるからな！。』

と言いつつ、向こうは切ってしまった。

第19弾 怒り（後書き）

W「申し訳ありませんでした……………」（土下座）「

翼「……………テストの結果は？」

W「良くもなく悪くもなく、いや、ちょっと悪いかな？」

翼「……………そうかそうか。」

ジャキ（銃を構える音）

W「え、あの、ちょっと……………」

バキユンバキユン！！

W「ぎゃあああああああっ！」

ドタ……………（作者が沈む音）

翼「まったく、少し反省してろ。」

えー、と言うわけで、しばらく更新が滞ってしまいすみませんでした。

今後は、もっと頑張るようにダメ作者に言っておきますので、
今後も応援よろしくお願いします。

次回もお楽しみに！」

俺は、最悪の事態を考えてしまった。そのとき、アリアが

「キンジ。大丈夫、あんたならできる。できなきゃいけないのよ。武偵を辞めたいなら武偵のまま死んだら負けよ。それに、あたしだってまだ……ママを助けていない！」

アリアの言葉を聞いてみると、希望が見えてきた。

「あたしたちはまだ死ねないのよ！こんなところで死ぬわけがないわ！」

「あつ………！キンジ、あれを見る！」

視線の先には、真っ暗だった『空き地島』にキラキラと光が見えていた。

『三人とも見えているかバカヤロウ！！』

武藤との電話が復活したと同時に雨が叩く音と武藤の声が入ってきた。

「武藤！？」

『お前が死ぬと、白ゆ……泣く人がいるからよお！オレ、車両科で一番デカイ

モーターボート、パクツちまったんだぞ！アムド装備科の懐中電灯も

みんなで無許可で持ち出してきたんだぞ！全員の反省文、翼とお前で書きやがれ！』

そして、次々と回線が割り込んできた。

顔が血で真っ赤だろうな、と思いつつ、横を見ると、

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

キンジがアリアを抱っこしていた。それはいい。一番マズイのは、スカートが捲れ上がっていて俺はその中をみてしまった事だ。

先に起きていたキンジも俺が見てはならないものを見てしまったのに気付いて、

素早くかつアリアを起こさないように慎重にスカートを元に戻した。

「見てない見てない見てない……」

「大丈夫だ、あれは事故だ。大丈夫だから落ち着け……」

なんとか落ち着けた。嫌だぜ、上で殺されて下でも殺されるなんて。

事がやっとならわり、部屋に戻る。

と、思ったが、なぜか俺だけは病院に残らされていた。

理由は簡単。まず、キンジには12箇所の打撲、擦過傷、捻挫があったのに俺には

かすり傷一つなかった事。さらに、ヒステリアモードの解けたキンジがすっかり俺が

頸動脈を切られた事を喋ってしまったこと。普通なら冗談で済まされるだろうが、

俺のシャツについた大量の血を見たら、信じざるを得ない状況になっってしまった。

と言うわけで、検査の為に残らされてしまった。

「そついえば、アリア。どうするんだろ？」

武偵殺しの一件が片付いたら、パートナーは解消。

となると、アリアはロンドンに帰るのか……………。

アリアとはもうさよならしないとだめなのか……………。

……………言えるかよ。

せつかく見つけた、パートナーにさよならなんか言えるかよ！

過去に縛られていた俺に抜け出すきっかけを作ってくれたあいつとさよならするのか!?

パートナーとのさよならは一回で十分だ！

「……………こんなところにジツとしていられるかぁ！」

俺は、今までで一番速い速度で走り出した。

「ハアッ、ハアッ……………飛び出したはいいけど、アリアどこにいる

んだ？」

闇雲に探すわけにはいかないし……。すると、すこし遠くから、へりの音が聞こえた。

「あつちか！」

俺は再び全速力で走り出した。

音が聞こえてきたのは女子寮からだ。俺は一直線女子寮に向かって走っていると

「キンジ！」

「翼！」

キンジと会った。そして、お互い無言で走った。

寮の中に入ると、上へ向かう為にエレベーターに乗ろうとしたが、点検中、の札が付いていて使用できなかった。俺とキンジは非常階段を昇った。

息絶え絶えの状態で屋上に出ると、へりは10メートルほど飛び上がった。

「「アリアーーーーッ！！」」

俺たちは叫んだ、何回も何回も、のどが潰れるくらい叫んだ。すると、

ガラッ！

驚くほどの勢いでへりのドアが開いた。

「おっそい!!」

そこから顔を出したアリアがワイヤーを括り付けてへりからダイブしてきた。

「おいおいおい!!」

「ちよっ……おまつ!!」

しかし落下中、驚いた操縦士が操作をミスったらしい。へりがふらついてアリアが振り子のようになった。

「えっ?ちよっ!!?あ、あれっ!?!」

「お、おい……ちよっと……」

二人がかりでキャッチしようとしたら、屋上の金網についた。そして、ワイヤーを切り離し俺たちめがけて斜めに落ちてきたアリアに……

……空から女の子が降ってくる思っか?……

真っ青になった瞬間。

がっしやああああああん!

俺たちにしがみついて、屋上の金網がひしゃげた。

俺たちというよりはキンジのほうにしがみついたため俺にはアリアの拳が顔面にヒットした。

「おまえなあ！」

「Aria What're you doin'!!」

へりから白人が叫んでいた。アリアはそれに対して、

「へー」

と答えていた。それにキレたのか、何人かが降りてきやがった。

ヤベツ、人数が違いすぎる。これじゃあ、アリアを連れ戻されてしまふ。

「どうするキンジ？」

「アリア、ワイヤーの予備はへりの中にはあつたか？」

「なかったわ。今のリペリングで使い切ったはずよ。」

するとキンジは屋上の出入り口のドアノブを叩き壊した。

「なっ、出入り口を潰してどうするんだ？」

「なあ、アリア。お前はここから、俺たちのために跳んだんだよな。」

「……………?」

「今の俺は、何もできない素の俺だけだな、お前がしてくれたことの恩返しくらいはできるんだよ！」

キンジはさつきひしゃげた金網に向かって走り出した。

「アリア、お前は独奏曲だ！そうなんだろう！でもな！」

そして、金網をジャンプ台にして、

「俺がBGMぐらいにはなってる！」

そのまま飛び降りた。アリアもそれに続いて飛び降りた。そして、初めて会った日と逆になりながら。温室に落ちた。

「キンジ、抜け駆けはないぜっ！」

そして、俺も飛び降りた。

落下中、寮の壁にスラッシュを打ち込んだが、刺さりが甘かったらしく

外れてしまった。キンジとは違い、俺は速度を和らげてくれるものが無い。

このままでは、グロイことに……。

そのとき、突然、スラッシュのワイヤーが曲がり、壁に刺さった。それはまるで、理子のように……。

「！！！！！」

突然のことにおれ自身が驚いていた。

地上に降りると、キンジとアリアがなにやら言い争っていた。
「これからもっと騒がしくなりそうだ。」

第20弾 不時着成功と目覚め（後書き）

W「痛かった。あれ？翼って超偵だっけ？」

翼「俺に言われても……。ていうか何で理子と同じ能力？」

W「うん。生まれた時に何かあったんじゃないの？」

翼「……。あれ？俺って、生まれどこだっけ？」

W「まっ、いいや。それにしても、やっと原作の一卷終わったよ。」

翼「20話目と切りもいいな。」

W「と言うことで、次から二巻目に入りまゝす。それじゃあ、

W&翼「次回をお楽しみに！感想をお待ちしてまゝす。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3233t/>

緋弾のARIA 片翼の武偵

2011年12月11日20時50分発行